

「人を想う心を忘れずに」事業を展開 従業員満足度を高めて新時代に挑む

昭和46年に千葉県市原市で創業した丸川運送(株)は、石油化学製品輸送に舵を切った後は主力取引先と二人三脚で輸送品質向上への取り組みを着実に進め、主力取引先からの高い信頼を獲得してきた。「人が財産」との思いを掲げながら同社を率いてきた須田和道代表取締役は、輸送品質向上とともに、「福利厚生充実」や「賃金の持続的な上昇」など、従業員満足度アップにも挑戦し続けている。



須田社長（左）と、同社運輸部で働く息子の和寛氏。後ろにはお洒落な本社事務所も見える

■管理体制強化を通じて事故減少を実現 荷主との交渉を重ね持続可能な物流目指す

丸川運送(株)は、須田社長の父親にあたる先代社長が昭和46年に設立した運送会社である。設立当初は農産物やコンクリート製品、建材などの輸送を手がけていたが、54年に、現在では主力取引先となっている化学メーカーの物流子会社からの輸送要請をきっかけに、徐々に石油化学製品輸送の比重を高めていった。現在では、プラスチック原材料などの輸送が主体となっている。

59年、須田社長は高等学校を卒業して同社に入社し、まずはドライバーとしてキャリアをスタートさせた。その直後、バブル景気を迎え、同社の輸送量は大きな伸びを見せた。その一方で、些細な事故が少なからず発生していたことから、平成3年、同社は主力取引先から「もっと社員教育に力を入れるように」と注意を受け、それを機に、管理体制の強化に取り組んできた。

まず、それまで市原市内の3か所に点在していた同社の事務所を一本化し、4年に現在地に本社事務所を整備した。事務所を統合したことで業務効率が飛躍的に高まったほか、事務所が分散していたことで発生していた連絡ミスに起因する、誤配などの商品事故も大きく減少したという。

同事務所には従業員の健康に非常に気を配っていた先代社長の思いが強く込められており、まるでロジックにいるかのような快適な室内環境が大きな特徴になっている。3階にあたる屋根裏部屋には週に3回指圧師が訪れ、腰痛や肩こりなどに悩んでいる同社のドライバーの健康指導や指圧施術を無料で受けることができるほか、敷地内に露天風呂を設置するなど、従業員にとって居心地のいい空間に仕上がっている。

一方、同社では事故撲滅を目指して、従業員教育や設備投資などにも力を注いできた。

従業員教育では、多くの従業員が集まりやすい給料日に講習を実施。時には、主力取引先の担当者を同社に招き、荷扱いに関するノウハウを指導してもらうなど、事故防止に向けて「何に気を付けるべきなのか」を明確化しながら、従業員の理解を促すように心がけているという。なお、コロナ禍以降は集合教育の実施が難しくなっていることもあり、ドライバー待機室に大型モニターを設置し、ドライブレコーダで撮影したヒヤリハット事例などを放映するようにしている。

また、設備投資面では、輸送に適した車両への刷新を挙げることができる。同社ではかつて平ボデー車を多数所有していたが、プラスチック原材料を紙梱包で輸送していたため、雨天の時にはシートをかぶせるなどの手間があった。昭和60年頃にウイング車を導入以降、同社では平ボデー車からウイング車への切り替えを順次実施。バブル期を迎えて輸送量が増大したのをきっかけに、ウイング車が主力となった。平成16年頃からは一部輸送をトレーラに切り替え、輸送のさらなる効率化を図っている。

現在、同社には48人のドライバーが在籍しているが、そのうちの10人ほどが女性ドライバーである。女性ドライバーの中には、平成初期に同社に入社以来30年以上にわたり戦力として活躍してきた人もいう。また、同社では入社以来長年にわたって勤務している従業員も多く、現在70代で活躍しているドライバーが4人いるという。

同社における従業員満足度向上の秘訣を探ると、まず「充実した福利厚生」を挙げることができる。先に紹介した指圧師による無料施術などのほか、コロナ禍前には毎年夏になると、本社前でバーベキューを開催していたという。また、遠隔地に住む若者にも同社に入社して



須田和道 代表取締役



ロッジのような事務所。指圧師を招いてドライバーの健康管理に気を配っている



ドライバー待機室に大型モニターを設置。ヒヤリハット事例を放映して注意を促す



「人が財産」と考える須田社長は、従業員にも優しく接するよう日頃から心がけている

もらえるようにするために、同社が所属している協同組合に須田社長が提案し、ワンルームアパートを整備している。

そして、もうひとつの秘訣として挙げることができるのが、「賃金の持続的な上昇」である。同社では、毎年主力取引先との運賃交渉を行っている。4月1日に行われる主力取引先側の予算改定を前に、同社では1月に交渉を実施。その際には、精緻な原価計算に裏付けされた運賃交渉に向けた資料を作成して説明するとともに、「最低でもこのぐらい運賃を上げていただければ、当社は立ち行かなくなってしまう」と主力取引先に対して力強く説得。同社ではこの2、3年、毎年5%以上の運賃増額を果たしてきたという。

「適正運賃・料金を収受し、それを原資として従業員の賃金を持続的に上げていくことができなければ、当社の将来を担う若年層の獲得はもとより、これまで当社で長年頑張ってきた従業員に報いることができず、ベテラン層の大量離職にも繋がりがかねません。物流二法による規制緩和で、それまで運送事業者が収受できてきた運賃・料金が大きく下がっただけに、荷主との交渉を通じて少しでも巻き返していかなければならないと強く感じています。近年、トラック運送業界に対する荷主の理解は広がりつつあり、交渉しやすい環境になってきていると感じています」(須田社長)

同社では、荷主との交渉を通じて、ドライバーの働き方改革にも積極的に取り組んでいる。同社ではかつて、北関東への輸送の際には高速道路を使わずに、国道を使っていた。荷主との交渉の結果、高速道路を有効に活用できるようになったことで、ドライバーの労働時間短縮に繋がったという。なお、高速道路料金は荷主負担となっており、運賃に上乗せする形で収受している。

さて、須田社長は入社後に主力取引先の物流子会社への出向を経て、平成6年に同社に戻ってきたが、その頃から千葉県トラック協会青年部会に入会し、研鑽を積んできた。

「社内の総務規程等に関する勉強会に参加した際には、先代が社長を務めていた時代にはなかなか直接触れる機会がなかった社内規定管理に関する理解が深まったとともに、『社の実態は理想的な姿になっていない』ことが分かり、社会保険労務士と相談しながら改善を図りました。青年部会は事業経営に活かすことのできる情報を得ることができ、非常に有効であると感じています。現在は、息子(須田和寛氏)が入会し、業界の諸先輩方から様々なアドバイスを頂戴しているところです」(同)

平成12年8月、先代社長が60歳の誕生日を迎えると、突然、当時専務だった和道氏に「自分は社長を辞める」と宣言したという。翌年に和道氏は34歳という若さで同社の社長の座を先代社長から引き継いだ。なお、先代は心臓病を患っていたため、翌14年にこの世を去っている。

三十代半ばで同社の2代目社長となった和道氏に対する従業員の目は厳しいものがあつたが、須田社長は「人を想う心を忘れないでいたい」という信念を強くもち、人を選ばず、誰にでも同じ態度で接するように心がけてきたという。「それを根気よく続けてきたことで、時間はかかったものの、多くの従業員から社長として認められるような存在になることができた」と、須田社長は社長就任直後を振り返る。

現在57歳となり、経営者として円熟期を迎えつつある須田社長。これからも多くの若い従業員を獲得し、同社を一層活気のある会社にしていくことが、目下の目標であるという。

ホットにゆーす

■まるで「自然のサファリパーク」 コロナ禍をきっかけに林道走行に魅了

車の運転が好きな須田社長は、国道や県道など、これまで多くの道を走り尽くしてきた。

コロナ禍を機に、「山の中を走れば、人に接することはないだろう」と考えて林道に入った須田社長は、たちまち林道を車で走行する楽しさに魅了されたという。

緑豊かな林道はまるで「自然のサファリパーク」で、イノシシやシカ、キョンなどの動物が須田社長を迎えてくれた。いまでは県内のほか、茨城県や群馬県、長野県など近県の林道にも訪れ、二人の弟とともに愛車のジムニーで山々を駆けている。



「自然あふれる林道を、愛車ジムニーで駆ける須田社長」

企業プロフィール

丸川運送株式会社

代表取締役 須田 和道

本社 千葉県市原市青柳北 3-4-5

従業員 72人(うちドライバー48人)

台数 65台